

し、落ち着いた生活をするようになった。我が家でも四人の子供はそれぞれに成長し、自分で選んだ道を進んでいる。

今は、頼まれれば満州開拓、終戦前後の苦勞話などを話し、避難中無念な思いをしながら死んでいったであろうヤス子や二人の子供のこと、そして共に苦勞した友達を追悼しているが、私たちはお国のためということで働き、そしてその犠牲となって現在の平和をもたらしたことを特に力説している。

満州十年の生活から引揚げて

栃木県 太田 サヨ

一 生い立ちと渡満の動機

私は、栃木県の北部那須連山の麓、那須温泉の南に位置する那須郡西那須野の養蚕農家の、九人兄弟の八番目の子供として大正四（一九一五）年

五月に生まれました。

物心のついた幼年のころから、家の躰として自分でできることは自分でやるということを強く言われて育ってきました。小学校四、五年のころになると、台所に立って夕食の仕度をしたり、養蚕の最盛期には桑掛けといって蚕に桑の葉を与える仕事などを、猫の手も借りたいくらい忙しい両親たちと一緒に養蚕場で働いたものでした。

当時の日本全体は不況のどん底にあって、「働けど、働けど我が暮らし楽にならず！」の時代でしたので、養蚕業もその例に洩れず大変な不況でした。繭が不況なのでそれに関連して、その繭糸を原材料とする織物工場も不況で、小説や映画などにもなって大正・昭和の大恐慌の代表のような、「女工哀史」で国民の涙を誘うような話は事実のことであった時代でした。

繭一貫目（約四キログラム）が五十銭から上物で六、七十銭ぐらいで、それはそれは目も当てられない状況でした。

そのように大変なときに、繭かきといって蚕を入れて繭を作らせる作業のために、前夜から繭を乾燥させるため蚕室に入れた炭火の取り扱いの不注意から火事を出してしまい、養蚕場はもとよりのこと、母屋や納屋などが全焼してしまいました。私が小学校五年生のときでした。

このとき、火を消そうとした父は大火傷を負ってしまい、火傷が治るまでに長い日数がかかりましたが、幸いに退院することができました。ところが、父が退院したとひと安心したらすぐに、今度は母が看護の疲れからか、足を悪くして歩けなくなってしまうました。

そのころ一番上の姉が、東京の慈恵医科大学で看護婦をしていましたので、その世話で東京の病院に入院させてもらい治療を受け、やっと歩けるまでになって帰って来たときには、家族一同は泣いて喜んだものでした。

年が経つに従って、兄、姉もそれぞれ結婚したり就職したりして、家を出て一人立ちしていきま

した。一番上の兄は、お嫁さんを迎えて夫婦で我が家の仕事をやっていました。

私も小学校を卒業するころになり、進学することを夢に見ていましたが、兄は働き手が一人でも欲しいことから、私が小学校を卒業して手伝いをしてくれることを期待していました。私は、「進学したい！」などととても言い出すことはできずに、自分の決心で高等科に進むことになりました。その当時は、高等科に進学することは大変で、よほど勉強ができるか、または家が経済的にゆとりのある人だけでした。私の部落では私のほかに、男の子一人だけが高等科に進学しました。

二年間を無事に過ごして卒業ということになり、最初の約束どおりに家で手伝いをする事になりました。両親も大変に喜んでくれました。そんな矢先に、父が脳卒中で突然に倒れ、そのまま息を引き取ってしまいました。五十六歳でした。火事騒ぎから家の再建などで精力を使い果たしてしまっただけでしょうか。大きな借財だけを残して

の死でした。母をはじめ残った家族の悲嘆は一通りのことではありませんでした。

まだ不況の嵐が世間一帯を覆いつくしていた時代であっただけに、貧乏農家の暮らしは、どうにもならない有様でした。

夢中になって働いている家族の姿を見るにつけても、何とか私の力でこの苦境から脱することができないかと考えてみても、実際にはいかんともしがたいことで、本当に情けない気持ちでいっぱいでした。

働いているうちに、いろいろなことを見聞きしました。貧乏が原因で起こる嫁と姑のいざこざ、そして農村の家庭内におけるお嫁さんの立場の弱いこと、そしてそれからくる気苦労、さらにはそれが高じての閉鎖的な行動など、女の立場、特に嫁の立場のなんと弱くて悲しいものかを知りました。そんな気持ちで悶々としているうちに、家族とのしがらみや世間との気兼ねがない満州に行ってみたくてみたいという憧れの気持ちがわいてきました。

「主婦の友」とか「婦人倶楽部」などの雑誌に載っている、満州に行った開拓花嫁の手記や雑誌記者のルポルタージュなどを読んでいるうちに、次第に満州に対する知識が入ってきて、憧れの気持ちが増してくるようになりました。そのように満州熱に浮かれているときに、栃木県から満州開拓に行った人の話や、開拓の花嫁を迎えに一時帰国をした人、さらには花嫁を探しに帰って来た人などの話を聞き、思いが一層高ぶってきました。

二 渡満前後のこと

昭和十（一九三五）年、日本の経済不況は少しづつは良くなってきたとはいえ、まだまだ苦しいものがありました。二十歳になった私は、そろそろ先行きのことを考えるようになり、新天地満州に行くことを真剣に考えるようになりました。そのころは、新聞でも「大陸の花嫁」という読み物が連載されていて、農村の未婚女性には人気の記事でした。それを読んだ私は、親友に「私もぜひ行きたい！」と胸のうちを明かしました。

そのうちに、多分七月か八月のころだったと思います。隣り村の越井さんが、奥さんを迎えに満州から一時帰国しておられて、私の叔母に、「親しくしている開拓団の同僚から嫁さん探して頼まれた」との話をしたそうです。以前から私の開拓花嫁の希望を知っていた叔母は、すぐに私にこの話を持ってきました。わたしにとっては希望どおりの話で、願ったり叶ったりのことでした。夢は一遍に膨らんできました。

だが、当時の未婚女性の嗜みとして、「はい、そうですか。喜んで行きます。有り難うございませぬ。よろしくお願い致します」とは、すぐには言い出せませんでした。当時、父はもう亡くなっていましたので、まず母に相談しましたが、母は私の気持ちをよく理解してくれて、快く賛成してくれました。兄は、わざわざ相手の人の出身地である下ヶ橋というところまで出掛けて、聞き合わせしてくれました。帰って来て調べたことを話してくれて、「結構な人だよ。心配ない」と言っ

てこの縁談に賛成してくれました。

越井さんは、奥さんを伴って十月二日に神戸港から出発する予定になっていましたので、私もそれに合わせて、一緒に連れて行ってもらうことになりました。嫁入り準備をするのに、急な話で残り日数もなく大変に忙しい思いをしました。私だけではなく、栃木県内から同じような花嫁候補が六人も一緒にになり、越井さんに引率されて渡満することになったのです。

予定通り十月二日神戸港から連絡船に乗船。名にし負う玄界灘の荒波に揺られて航海の後、満州の玄関口大連に到着し、足もとがおぼつかないままに上陸し、満州に第一歩を印しましたが、あるとき棧橋をやっとの思いで渡った苦しさは、別の意味で今でも忘れられない思い出です。

大連の市街に入ってまず驚いたのは、大連が想像もしない近代的な大都会であったことでした。繁華街には道路の両側に規則正しく街路樹が植えられていて、町並みもモダンで美しく、紙屑一つ

落ちておらず、見た目だけでも繁栄を象徴しているようでした。

大連からハルビンに向かい、それから松花江を水車の付いた船で数日間。何の変哲もない兩岸を眺めながら五日間も船の中で過ごしたのですが、このとき満州というのは、人の話や書いた物を読んだだけではその実態は分からないくらいに広大であるということを知りました。

上陸したところは、入植先に近い佳木斯チャムスでした。すぐに迎えが来て入植地に行く予定でしたが、匪賊の出没、横行が激しく佳木斯から一歩も出ることができず身動きがとれないため、やむなく落ち着くまでしばらく逗留することになりました。なかなか事態が解決しないので、致し方なく軍隊の護衛付きで佳木斯を出発し、やっと入植地の弥栄村、栃木小隊に到着しました。

ここで初めて、出迎えてくれた夫となる人と対面しました。そのときの気持ちは何とも言えない複雑な思いでしたが、希望を胸いっぱい抱いて

満州に足を踏み入れ、現地で夫となる人に迎えられたときは、「本当に良かった」と、私の決心に間違いのなかったことを思い感慨無量なものでした。そして、「希望が適えられたからには、力の限り頑張りましょう」と、一人で心の中で誓ったものでした。

三 弥栄村開拓団での生活

当然、満州だからと覚悟はしていましたが、まず寒いことには驚かされました。零下二十度、三十度という寒さは、西那須野でも真冬は相当に寒さ厳しいのですが、それとは較べものにならないくらい寒い寒さでした。手袋、防寒帽がなければ絶対に家の外には出られません。しかし家の中は、温突オシドクというもので暖房をしているので、外気温はどんなに厳しくても家の中は暖かいものでした。私たち夫婦は、二軒長屋の片側で生活をしましたが、隣家の奥さんは、当時出産のため産院に入っていました。数日後にかわいい男の赤ちゃんを抱っこして帰って来られました。料理の好きな奥

さんで、いろいろと上手に作っては私にまで持って来てくださったので、私も感謝しておいしく頂戴したものでした。

この手記にも書いたとおり、私の実家は養蚕農家だったので、猫の手も借りたいという忙しき身をもって経験していました。それからすると毎日毎日遊んでいるようなもので、子供のできないうちには主人の手伝いをしたと思っていて、主人にもそのことを話していましたので、山仕事に行くときにはついて行って、あまり役には立たないが細々としたことを手伝っていました。そんな日は、何となく気持ちも充実していて幸福感でいっぱいでした。

当時、家族を受け入れる家がやっと完成したばかりで、畑はまだ開墾されていませんでした。自家用の物を作るには自分で開墾しなければならず、私は満州馬三頭に、「リージャン」という鋤を引かせて耕しました。肥料は全然やりませんでした。スイカ、カボチャ、トマト、その他の野菜

菜、何を作ってもすごく良い出来栄で、いつも豊作でした。どうして満州の土地が、こんなにも肥沃なのかよく知りませんが、こんなに良くできるとは想像もしていませんでした。

昭和十一年三月、夫婦で待望していた子供が生まれました。女の子で主人は、悦子と名付けましたが、すごく小さな赤ん坊で、育てるのに少し苦労しました。母乳は十分に出るので、その処理に苦労したものです。体が小さいので無理をして飲ませるとすぐに吐くので、ほどほどにしなければならず、気をつかったものでした。だが、半歳ぐらいたると、遅ればせながらよその同じような月日の赤ん坊に近づくくらいに育ってきました。「小さく生んで、大きく育てる」を地でいったものでした。

昭和十二年になると、弥栄村開拓団にも日本内地から、トラクター班という農耕機械を持ったグループが応援に来て、弥栄村全地域を機械で開墾して回りました。このときに、在籍していた開拓

団員に、一人二十町歩の土地が配分されて、一応自分の土地を持つようになりました。これから弥栄村第一次武装移民による農業が、本格的に始まったのです。

家族だけで二十町歩の土地を開墾し、農作業をすることは大変なことで、どこの家でも現地人をするから三家族ぐらい雇って開墾をしました。栃木小隊では、家族だけで作業をする家はほとんどなく、雇った現地人に小作をさせるやり方をとっていました。

したがって開拓団の主婦は手が空き、もっぱら子育てに専念していました。昭和十四年の九月に、我が家でも二番目の子供が生まれました。今度は男で、弘と名をつけましたが、男の子のせいか神経質で気難しい子で、男の子はこんなに育て難いのかと苦労したものです。悦子のときは小さいことが苦労の種でしたが、反面やさしくて手も掛からず、本当に楽に育てられたのと思ひ、男の子の育て方が大変なことを初めて知ったもので

した。弘が二歳になったころ、二人共重い麻疹にかかりましたので、免疫ができ、のちに避難民生活で苦労していたときも、これには心配することなく過ごしました。「災い転じて福となす」の地をいったものでした。

二軒長屋に住んでいたときに、主人とお隣りの岡田さんとで小間使いのようなことをさせて面倒をみてかわいがっていた十歳ぐらいの現住民の子供がいました。どこからここに来たのか、名前や生年月日を尋ねても何も答えず、もちろん両親や家族も知らないのです。私たちは小^{シヨウハイ}孩子と呼んでいました。その子はすぐく利口でした。私たちが結婚する一年前ぐらいに、栃木小隊に迷い子になって来たようですが、日本語の理解も早く私の話すことは大体分かっています、間違いない返事をしていました。私はついその子を頼りにしてしまつて中国語を覚える努力をしなかったのです。ほとんど話すこともできないままでした。

主人は、暇があると現地人の家に遊びに行き、

雑談をするくらい仲良しになっていましたし、ときどきは悦子を連れて行って、かわいがってもらったりしていました。手製の赤いかわいらしい布の靴を頂いて来たりもしていました。

件の小孩子は、我が家で預かっている形になっていたのも、成人になれば世帯を持たせる心づもりだったし、本人にも話してあったのですが、年ごろになって本人も何か考えるところがあつたのでしょうか。ある日突然に家を出て行き、消息を絶ってしまいました。長い間働いてくれ、みんなとも気が通じていたのにと思うと残念なことでした。相談事があつたならば、話してくれば何か良い解決方法もあつたのにと、かわいそうにも思い、今になつてもそのことが気掛かりになっています。

二十町歩の土地を配分されましたが、前に建てた家は配分地と離れていて不便だったので、新たに家を建て直しましたが、以前よりも広くなり何となく日常の生活にもゆとりが出てきました。満

州に来てから六年余りになったので、母や、兄姉たちに安心してもらいたく、私の元気な姿を見せるために昭和十六年の春に、初めての里帰りをしました。内地でのお花見を期待していたのですが、主人の都合がつかずに二人の子供を連れて先に帰郷しました。一番心配したのは、私は船に弱いので、すぐに船酔いをするのでした。自分だけならば食べなくても何とか我慢できるのですが、二人の子供はそうもいかずに困っていました。が、船室で隣り合わせになった方が親切に面倒を見てくださったので大変助かり、何とか船旅を過ごして新潟港に上陸し、その日の夕刻には西那須野の実家に着きました。母の元気な顔を見た途端に今までの張り詰めていた気持ちが緩み、急に疲れがでてきました。その当時は、満州奥地から内地には三昼夜の日数が掛かりました。一同から、よく一人で二人の小さい子供を連れて長旅をしたと褒めてもらいました。

実家に滞在中は、日光見物に行ったり塩原温泉

に泊まったり、主人の母と私の母とを連れてお伊勢参りをしたり、京都、奈良を回ったりしました。主人も帰って来ましたので、悦子を主人に任せて、私は弘を背負っての旅行でしたが、若さで少しも苦になりませんでした。今になって思い返すとよくもまあ小さな子供二人を連れて、あちらこちら歩いたものだったと一人で感心しています。

再び弥栄村に戻る日も迫ってきたある日、新潟港からちよつと腑に落ちない電報がきました。今と違って近くに電話がなく相手先の電話番号も分からないし、乗船日も迫っていたので、新潟港に行くよりほかなく、慌ただしく帰る準備をして新潟港に向かいました。分かったことは、予約してあった船が座礁して当分航行不能となったとのことでした。これには少々慌ててしまいました。新潟から敦賀港の船会社に連絡をしてもらい、出航間近な便があるとのこと、急いで敦賀に行き飛び乗るようになして乗船しました。この間の乗り換

えの手続きが面倒で、私一人だったらどうにもならないところでしたが、幸い主人が一緒だったので助かりました。

乗船した船も、今度の航海で廃船になるという老朽船で、外海に出ると大揺れになり、人は船室の畳の上をごろごろと転がされる有様で、私はすぐに船酔いが始まり、食事は一度も喉を通りませんでした。

主人と一緒に楽しい道中を期待していたのですが、いろいろなハプニングに襲われて、散々な旅となりました。どこまで運の悪いことかと嘆いたものでした。

このころになると、治安もだんだんと落ち着いてきて匪賊などは出なくなりましたが、月夜に家の近くまで出てきて遠吠えする狼には、やはり身のすくむ思いでした。この狼にはいろいろと痛めつけられました。子豚を鳴かせながらくわえていたり羊を全滅させたりで、悔しくて地団駄を踏む思いをしたことが何度もありました。日中は

そんなことはないのですが、夜は本当に恐ろしいことでした。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が始まり、日本も満州国も内外に多事多難な時世となりましたが、我が家では次男の功が生まれ賑やかにになりました。戦局がだんだんと悪化していても、満州ではまだ影響がほとんどなく、新聞を読んで初めて知るばかりでした。そのうちに、栃木小隊の野沢さんに召集令状がきて出征されました。海軍さんでしたので、早かったでしょう。その後、お気の毒にも南方の海で戦死されたという公報が入りました。このころになると他人事ではなくなり、主人にもいつ召集令状がくるかと、毎日落ち着かない日を過ごすようになりました。

功は体格も良く割合におとなしく、世話の掛からない子供で、静かになったなと思うと一人で眠っているような子でした。後日、引揚げのときは満四歳になる前で、歩くときは悦子に手を引かれて泣きもせず歩いた子供でしたが、麻疹にか

かっていなかったのが因なのか、亡くなってしまふとは当時は思いもよらないことでした。あの無邪気な功の姿が目に残っています。

昭和十八年に、悦子は小学校に入学しました。群馬、茨城、栃木の三個小隊合同の分校が茨城小隊にできて、それまでは本校の寄宿舎に入っていた高学年の生徒も、戻って来て分教場に通学するようになり、元気に通学しました。初めての我が子の入学でしたが、生来ののんきさに加えて勉強にもあまり関心がなく、教えもしなかったので、ほかの同学年生よりも若干遅れていたようで、参観日に行つて初めてそれに気付きました。壁に貼り出されている習字が、まるで字になっていないのを見てびっくりしたものでした。それからは私も本腰を入れて勉強をみてやりましたが、すぐに成果が現れるというわけにはまいませんでした。

昭和十九年には、三男の誠が生まれ男の子三人となり、それはそれは賑やかな家となりました。

四 終戦前後のこと

戦争は、日に日に激しくなり、そして厳しくなってきました。昭和二十年七月にはとうとう主人にも召集令状がきました。このときには弥栄村ではかなり大勢の方が出征しましたが、後に聞いたところでは、ほとんど戦争することなくシベリアに連行されたとのことでした。召集されることを予期しなかったわけではありませんでした、いざ主人がいなくなると、乳牛はいる、馬はいるで私一人ではどうにもならず、現地に頼んで面倒をみてもらうしかありませんでした。それまでは、家の中のことで、そして子供の世話が私の仕事で、それ以外はすべて主人任せでした。主人は召集された後々のことを考えて、薪を一年分くらい用意し、食糧は半年分くらいを確保しておりましたので、当分の生活は心配ありませんでしたが、四人の子供を抱えている私にとっては、今は困らないからといって安心はできませんでした。

戦況は悪くなる一方で、自分たちはこれからど

うなるのか、どうしたらよいのか、など行末のことを考えなければならなくなりました。いざという時のために保存食を作り備えることもしました。団員のそれぞれの家族は、みんな子供を抱えていて一人で頑張っている現状では、誰を頼ることもならず、すべて自分一人で判断し処置しなければなりません。今は暑い盛りだがすぐに寒さがやってくるので、そのときのことも考えなければならず、頭の中は混乱してしまいました。

忘れもしない昭和二十年八月十二日の深夜。

「とん、とん」と、窓を叩く音に目を覚まし、はっと思つて耳を澄ましていると、私を呼ぶ前の家の奥さんの声がしました。慌てて飛び起き窓を開けますと、「大変なことになりました！」と言いながら紙片を渡されました。よく見ると、そこには「回状」と書かれてあって、「戦況の急変によつて、開拓団は全員ここを引き揚げることになった。よつて、食糧は十日分、それに寒さに向かうので防寒の用意をして、明け方六時までに弥

栄駅に集合のこと」と書いてあるではありませんか？ 六時までにといえば、あと何時間もありません。予期しないことではなかったのですが、現実はその事態がきたとなると、やはり狼狽せざるを得ませんでした。常日頃はいざというときの心構えは十分にしていたつもりでしたが、いざその場になってみると、心は落ち着いているつもりでも、動作がそれに従わず何から手をつけたらよいのか迷ってしまい、ただおろおろするばかりでした。

九歳にならぬ悦子を頭に四人の子供。この子を守るのには私しかいれないと思ひ直して、気持ちを引き締めました。気を持ち直すと、不思議なもので次から次となすべきことが頭に浮かんできました。

まず最初に、十日分の食糧の用意、煮炊きしたものは長持ちをしないので焼おにぎりを作り、日頃から準備しておいた物をリュックサックに詰め込み、衣類も五人分の防寒具を用意し、着替えは

下着類だけとしましたが、それでも行李いっぱいとなってしまいました。悦子に誠を背負わせて、私はリュックサックと行李を背負うこととして、やっと準備ができました。

四人の子供を起こし、簡単に事の成り行きを話して、十年間に亘る生活の最後の朝食を済ませました。

長い間、家族の一員のように働いてもらった現地人とも名残を惜しみ、「二、三カ月も経ったら主人も帰って来るでしょうから、それまで農作物と家畜の面倒をよく見てください」と言って別れました。先のことは全く分かりませんが、ただ頼むより仕方がありませんでした。そのときの心境は、戦争に勝てばまたこの家に帰れるが、負ければ死を覚悟しており、日本内地に引き揚げるなどということは夢にも思っていませんでした。用意してくれた馬車に荷物を乗せて、家を出ました。住み慣れた我が家と、精根を傾けて開拓した二十町歩の土地、そして収穫目前の農作物、それらに

は未練がいっぱいでしたが、死を覚悟していましたが、横目で見ながら通りました。現地人は、「日本人がいなくなったら、再び匪賊の心配をしなければならぬ」と言いながら、泣いて別れを惜しんでくれました。

栃木小隊十二家族には、どの家にも主人はおりませんでした。全員がそれぞれの雇っていた現地の馬車に乗り、青い顔をして弥栄駅に送られて来ました。駅はごった返していましたが、続々と集まって来る人は、女、子供だけでした。遥か東方にあった忠霊塔に、黙禱を捧げました。

すぐにも汽車が来るものと思っていましたが、いつになっても汽車は見えませんでした。团长さんでさえも、行先は知らないようでした。夕方近くになってやっと到着しましたが、それは無蓋の貨物列車でした。今にも雨が降りそうな空で心配しましたが、はやる心なので、子供を乗せるにも荷物を持ち込むにも夢中でした。やっと貨車に乗り、腰を降ろしたのが夜の八時ごろでした。

家を出てから十四、五時間経っている計算になります。子供は眠ってしまい、大人はへとへとに疲れてしまいました。

南下するとばかり思っていた列車は、北上を始めました。夜半過ぎに佳木斯に着きました。樺川県公署などの役所では、重要書類の焼却をしているとかで、市内の各所から火の手があがっていました。私がここに来た十年前は、まだまだの町だったのに十年経った佳木斯の市街は立派な都会になっていました。

佳木斯を過ぎたころから、とうとう雨が降ってきました。「大降りにならないければ良いがね?」と話し合っているうちに、本降りになってきました。無蓋車なのでどうしようもありませんでしたが、大事に持ってきた毛布で仕方なく屋根を作り少しはしのびましたが、雨は止まずに翌日も降り続けました。横になることもできないくらいに人で詰まっていましたから、濡れた衣服を着替えるなどということはできずにいきました。もっとも床

上に置いていた荷物も水浸しになっていましたから、着替える物もありません。大勢の人が、わいわいがやがやとしているうちに、気が変になる人も出てくる始末でした。当時のことを思い出すと今でも身の毛がよだちます。

列車が止まるたびに貨車から降りて、飲み水の確保、おしめの洗濯をしましたが、ぐずぐずしているうちに動いては大変だと思ふと気が気ではありません。自分のことなどできません。雨が止むと今度は、じりじりと焼けつくような暑さで、誰でも体の調子が狂ってききました。

そのような苦痛に耐えながら、列車は緩化の駅に停車しました。多分、八月十六日の午前だったと思います。駅には避難列車が何本となく止まっています。私たちの一団もそこで降ろされました。

そこで、日本が負けたことを知らされて、みんなの手を取りあって泣いてしまいました。思いもよらないことでしたが、心のどこかでは、「ああ、

良かった！」と思ったことは事実です。

緩化駅から二キロメートルばかり西に行ったところに日本軍の飛行場があり、見渡す限りの大平原の中に、点々と変わった屋根の建物が見られましたが、それが飛行機の格納庫で何十棟もありました。格納庫と格納庫の間は平坦で、滑走路のようでした。その飛行場を見たときに、こんな立派なものを作ってもほとんど使用せずに終戦となったのかと思うと、ただ悔しいだけの気持ちになりました。涙がでてきました。一応ここに落ち着くことになりました。その間に、団長は今後のことを心配して、新京（長春）の開拓団の本部に行って交渉をしました。その詳細は分かりませんが、帰らぬ人となってしまうました。本当にお気の毒なことでした。

一棟の格納庫には、想像もつかないくらいの人収容されましたが、その半数以上は子供で、夜といわず昼といわずに「わいわい、がやがや、ぎゃーぎゃー」とうるさくて、夜でも満身に眠れ

ませんでした。

コンクリートの上にアンペラという敷物を敷いただけで、夜になると冷気が下から伝わってききました。おしめを洗う水もなく、不潔極まりない生活となりました。そのうちに病人は出るし、子供には麻疹が流行してきました。恐れていたとおり、功と誠が相次いでかかってしまいました。冷やしてはならないのに、体を温める布団もありません。八月末ともなると、朝夕は相当に冷え込んできます。発疹が出ずに内攻してしまい、手当もできないまま余病を併発してしまいました。ジフテリアが流行り出して、あつという間に二人共ジフテリアになってしまいました。このときのショックはたとえようもありませんでした。収容所にいた保健婦さんに頼み込んで注射をしてもらいましたが、良くなりません。私はどうすることもできずに、ただ、ただおろおろして様子を見ていただけでした。母乳もあがってしまい、栄養のある物もなく、次第に病状は悪化して、息も絶え

絶えになり泣き声も小さくなり、私は身を切られるようなつらさを味わっていました。神仏に念じていた私の願いもむなしく、三男の誠は九月九日に一年三カ月の短い命を終わらせました。

悲しかったですが、まだ三人の子供がいるので泣いてばかりはおれません。しっかりしなければと自分で自分を励まして、功の看病にあたっていました。功の病状も良くなる様子はありません。いつの間にか九月半ばになり、寒さは身にしみるようになってきました。

そんなころに、寒さを避けるために南満に移動することになりました。功の症状はかなり重症でしたが、私が背負い悦子に荷物を持たせて、みんなと一緒に行動をとることにしました。

緩化では、食べ物、飲料水など生活に欠かせない物は随分と不自由でしたが、集団で生活していたので外部からの危険は少なかったのが幸いでした。緩化からハルビンまでの移動は割合に順調でしたが、ハルビンから奉天（瀋陽）行きに乗り換

えたとときの恐ろしかったことは格別でした。ソ連兵の指示で、中国人が手先となって私たちを襲い、めぼしい物を手当たり次第に略奪して行くのです。敗戦国民となった悲しさでどうすることもならないのです。ときどき列車が止まっても、窓は決して開けませんでした。窓ガラスを割ってでも入ろうと騒いでいるのです。

どうにか奉天まで南下しました。すぐに収容されるかと思っていましたら、また別の貨物列車に乗り換えさせられました。この貨車には、煉瓦が積み込まれていましたが、外に放り出すこともできずに、平らに並べ替えてアンペラを敷き、やっと落ち着きました。

ここでも病人がたくさんいて、かわいそうでした。骨と皮ばかりになって、ただ水を欲しがらるばかりです。ジフテリアで喉が次第に塞がってきて声も出なくなり、水を口中に入れても飲み込むことができずに、すぐに口外に流れてしまう有様です。

私たちは、中国人が売りに来る「まんとう」（餡の入っていないまんじゅう）ばかり買って食べていました。男でも女でも、うっかり車外に出ると連れて行かれるのでした。子供は、次から次へと死んでしまいました。

一週間ぐらいこんな生活をしていましたが、交渉がまとまったのか下車することとなり、功を背負って降りようとした途端に背中がぐくつとして、それっきりでした。覚悟はしていましたが、四歳足らずで亡くすとは、あまりにもかわいそうでした。一カ月前に家を出るときにはあんなに元気だったのに、戦争のためにこんなに幼くして死の旅に出るとはと思うと、悔しさがこみ上げてきて泣きに泣きました。

死んだ功を背負ったまま奉天駅の広場に向かいましたが、一カ所に集団で待たされました。ちよっとの動きもできないほどに見張られていますので、功を葬ることもできません。仕方がなく男の方に相談し、功を渡しました。あの混乱し

た中ですから、茶毘だびにするとか埋葬するとかは到底できないことですから、成仏してくれたかどうかと今でもその思いが残っていてあきらめられませんが。

奉天に滞在することは危険だと判断されて、再び貨物列車に乗り換えて南に向かうことになりました。途中いろいろな思いをして、九月二十五日に大連に着きました。綏化を出てから十日間、まんとくと水だけでここまで来たのでした。約四キロメートルを歩かされたときの苦しかったことは、今でも覚えています。大連実業学校だった建物の落ち着いて、大連市に残っていた在留邦人の温かい受け入れに、ほっとしました。久しぶりに温かいご飯を頂き、そして優しい励ましの言葉を頂いたときの嬉しきで、それまでの苦勞が吹っ飛んだような気持ちになったものでした。大連では子供二人を抱えながら、今日は中国人の家で、明日は白系ロシア人の家だと、あっちこっちの家で働きました。

昭和二十年八月弥栄村開拓団の我が家を出てから、一年四カ月の避難民生活を過ごして、昭和二十一年十二月に引揚船に無事に乗船して、十年余りに亘る満州での生活に別れを告げました。十年前渡満のときに第一歩を印したあの繁栄の大連港が、今は見る影もない寂しい港になっていました。往きも帰りも、同じ港とは偶然だったのでしょうか。懐かしいのか寂しいのか、言葉には言い尽くせない感傷だけが残っていました。

十二月八日、佐世保港に上陸し、四、五日検査や消毒や手続きなどで留められましたが、日が経つに従って日本に帰って来たのだという実感がわいてきて、しみじみと命のあったことを痛感しました。

五 引揚げ後の生活再建

主人は、昭和二十年七月に召集されて、実戦にはほとんど参加することなくシベリアに連行され、飢えと寒さの苦しみをやっとなぎ抜いて命だけは助かり、骨と皮ばかりの栄養失調の状態にな

りながらも、二年余りの抑留生活を生き抜いて、二十二年十月に、やっと復員して来ました。

そのころ私は一応故郷に帰ったものの、主人のいないこれからの身の振り方をどうすればよいか悩みながら、実家の世話になっていました。突然、夜中に雨戸を叩く音に目が覚めて様子をうかがっていると、忘れもしない主人の声がありました。「あっ！ お父さんが帰って来た！」と、あとは声が出ずに飛び起きました。その瞬間の喜びは何と言ってもよいのか表現の方法がありませんでした。天にも昇る嬉しさ、喜びとはこのようなことを言うのだと、あとになって思いました。生きているのか？ もうこの世にはいないのではないのかと思ったりしていた主人の声でした。

主人が復員するよりも大分前に復員されていた星さんは、そのころ既に那須の開拓地に入植されていきました。主人にもしきりに入植を勧めておられました。主人は世話を掛けどおしだった年老いた母を残して行くことに忍びなく、生活にもあ

まり事欠かなかったことから、入植はせずにずっと当地で暮らしました。

残留孤児が日本に肉親探しに来るようになりましたが、引揚げ当時九歳だった長女の悦子と同じ年ごろの人が孤児となったことを思うと、本当に気の毒に思い、何とか肉親と対面できることを願わずにはおられません。

私たちが無事に帰って来ることができましたのも、弥栄村全体が集団で団体行動をとり、本部の幹部の方の判断、処置がしっかりしていたからだと悦子に言われて、改めて本部の役員の皆様に感謝を捧げたいと思いました。

引き揚げて来てから当分の間は、誰もが本当に大変な時代でした。しかし、当時はまだまだ若さもあり、苦勞を苦勞と思わずに働きました。主人がああの世に旅立ってから、早いもので二十四年が過ぎました。苦勞を共にしてきた長男も長女も、定年退職の時期を迎えました。弘は月に一度千葉から来て、力のいる野菜の取り入れなどを手

伝えてくれます。

私は今もって一人で、野菜作りや大好きな花作りをして楽しく余生を送っています。八十八歳の私はまだまだ元気です、平和な日本を願って毎日を過ごしています。

日本に住んでいる瀋陽人

群馬県 星野 満彦

はじめに

私の父末雄は、昭和五（一九三〇）年一月に、当時高崎にあった陸軍歩兵第十五連隊に現役兵として入隊し、昭和八年には満州国の治安維持の任務に就くために動員された連隊主力の一員として渡満して、軍務に精励していた。昭和十年に現地除隊となったが、服務成績が優秀であったので、連隊長の推薦により、そのころ満州国の花形企業であった南満州鉄道株式会社（通称・満鉄）に入

社した。翌年になって世話をしてくれる人があり、郷里の道子と結婚し、長男の私をはじめとして昭子、和子、節子という三人の妹を次々に出産し、親子六人家族で平和で温かい家庭生活を送っていた。

昭和十六年の冬に起きた大東亜戦争も、緒戦の華やかな戦局から、だんだんと厳しさを増してきた。昭和二十年になると敗色濃厚となってきた。そのような情勢となった七月には、心配していた父にも召集令状がきて、現地の部隊に入隊させられた。そして、八月の終戦によって多くの兵隊と共にシベリアに送られ、苛酷な労働に従事させられていたが、昭和二十三年、抑留生活から解放されて、妻子の消息を知るよしもなく出身地の群馬に復員した。

召集当時の父は、熱河省承德市の満鉄事務所勤務していたので、私たち一家は承德市街から少し外れた満鉄社宅に住んでいて、そのまま親子五人が残ってしまった。